

不登校対応加配教員の取組について

不登校生徒の状況

本校は小規模な学校であるが、現在不登校生徒は 16 名おり、不登校出現率は全体の 12%と大きな割合を占めている。小学校から継続おり、心身の不調など不登校の理由は多岐にわたるため、個に応じたきめ細やかで適切な手だてが一人一人に対して必要となる。

具体的な取組

校内体制として、不登校対応加配教員の指示の下、週に一度不登校対策委員会を開催し、各学年の不登校生徒の状態を共有し今後の支援の方向性を検討している。月に一度 S S W などにも参加を要請し、S C・心のふれあい相談員による面談、教育支援センター等の外部機関などと連携した支援を継続している。

不登校対応加配教員が、加配教員連絡協議会、都不登校対策加配教員連絡会等に参加した内容を、校内で O J T 研修を行い教職員に周知している。今年度の I C T 機器の活用した支援は、他校の情報をもとに本校でも取り入れたものである。通常教室と別室をオンラインでつなぎ、授業の配信や学習コンテンツの提供などを行っている。また、本校の実践の成果等は区の不登校研修会で発表を行った。

別室の登校状況については、職員室の専用ボードに名前を記入し、教員間で共通理解を図るようにした。不登校生徒が定期考査を別室で受けることができるように、全校体制で試験監督者を入れてもえるよう提案した。



不登校生徒が落ち着いて登校し、学習できる環境の整備を行った。個々に落ち着いて学習ができるようにブースを設営し、生徒の緊張をほぐすレイアウトを施した。生徒の学習への興味・関心を促進するための、習熟度・教科別学習課題の提供を行うよう各教科担当に要請した。

成果

不登校対応加配教員の取組により、現在別室に登校できるようになっている生徒が 6 名ほどいる。教室に入れない生徒も校内別室を開始したことで、登校するきっかけとなったと回答した生徒は不登校生徒 6 名中 2 名いた。

課題

不登校が重度化してしまっている生徒への対応方法、校内別室指導支援員との日程調整、当該生徒や保護者への周知、情報の提供などに課題がある。

登校支援教室の取組について

不登校生徒の状況

当該生徒は、校内特別支援委員会が本校登校支援教室の必要性を認めた生徒である。本事例の生徒は、中学校 2 年生の男子で、小学校 4 年生から登校しぶりがあり、小学校 6 年生 2 学期より不登校状態が継続している。不登校の要因は、保護者からの聞き取りでは、当該生徒が「学校に行こうと思わない」ことにある。保護者は登校刺激を行っていない。

具体的な取組

教室復帰が難しい不登校生徒の、校内における居場所を確保した。特別支援教育コーディネーター及び不登校担当教員を中心に、特別支援委員会において、担任、保護者、当該生徒による三者面談の内容や巡回心理士による生徒観察の様子等の情報を収集・分析・共有し、チーム支援の必要性と方向性を確認した。

中学校 1 年生 4 月当初の S C による全員面接を経て、S C とは週 1 回の面接でつながりを継続することとし、別室登校 (My Class) を活用することも確認した。チーム支援のための校内委員会を 1 週間に 1 度開催し、当該生徒の状況や変化を共有し、当該生徒との関わり方において、学級担任、学年教員、不登校担当教員、養護教諭、S C 等が共通した対応ができるよう調整した。

常駐する不登校対応加配教員は、基本的には授業を行わない。(生徒が希望すればその限りではない。) 最初に、生徒がその時間にやることを確認したら、基本的に教員は見守ることとした。

別室登校の際には、個別出席簿 (生徒の一言感想欄付き) を記入し、登校状態を視覚化することで、登校意欲を維持できるようにした。



成果

チーム支援を継続した結果、学年が上がるタイミングで、参加できると思える授業は出席しようとする気持ちが当該生徒に芽生え、校内別室対応の時間も活用しつつ週 4 日のペースで登校できるようになった。4 月は授業日数 17 日中 12 日登校し、5 月は 20 日中 16 日、6 月は 23 日中 21 日、7 月は 14 日中 11 日登校した。4 月は午前中登校して国数社理の授業に参加できたり、My Class を活用したりしながら登校した。

課題

当該生徒は、集団や他者と関わる授業が苦手で、視線もあまり合わず、コミュニケーションを図ることに困難さを感じることがある。校内別室指導支援員の配備など、校内別室指導体制を一層整備しつつ、S C とのソーシャルスキルトレーニングを引き続き実施することで、他者の気持ちを汲み取り、感情をコントロールして生活ができるよう支援を継続していくことが課題である。

不登校対応加配教員の取組について

不登校生徒の状況

当該生徒は、中学校3年生で、中学校1、2年生と休みがちではあったが登校はできていた。中学校3年生の1学期の途中に精神的な理由から登校できなくなった。また、母親から「精神科に通い、医者から登校刺激を与えないようにとされている」という情報が入った。当該生徒は、ヤングケアラーであることが疑われ、家庭での様子が見えない部分が多い。

具体的な取組

組織力の向上

不登校対応加配教員が中心となり、SSWと担任の連携を図る機会を設けるようにした。また、個別のケース会議を開き、子ども家庭支援センターや関係している保育園など外部機関との連携、今後の方針について確認をすることができた。

不登校に係る指定項目数値の減少及び解消

不登校対応加配教員が加配されて2年目となり、本校の不登校生徒の割合は5.12%となった。これは昨年度の9.04%からマイナス3.92ポイントである。不登校対応加配教員のコーディネートにより、教職員が不登校生徒と多く関わるようになったことがポイント減少の要因の一つである。

校内体制の強化

校内別室に通室している生徒に対して、不登校対応加配教員のコーディネートにより担当教員だけでなく、学年に関係なく多くの教職員で対応することができた。学習面に不安を抱えている生徒もあり、教職員によるフォローにより教室復帰に向けて行動することができる生徒もいた。

個々の不登校生徒への支援

不登校対応加配教員を中心として、校内委員会等で不登校生徒への対応について確認をした。連絡の頻度や家庭訪問について、SSWとの連携など、生徒の希望に沿った対応ができた。



成果

当該生徒は、関係各所のアプローチにより、校内で行われた地域のお祭りに参加でき、教職員とも交流を取ることができた。また、修学旅行にも参加することができ、意欲的に学校との関わりをもつことができるようになった。

課題

不登校対応加配教員の取組により、担任が当該生徒と関わる時間がとれているが、担任の業務が多く限られた時間しか対応ができない。

外部機関との連携した支援について

不登校生徒の状況

当該生徒は、小学生の時から不登校状態であった。本校入学当初は登校することができていたが、中学校 1 年生の夏季休業前より不登校状態となった。不登校の要因は、不明な点が多いが、保護者からの聞き取りでは、登校することに当該生徒が価値を見いだせていないことにある。

具体的な取組

家庭訪問

当該生徒が、不登校になった夏季休業から不登校加配教員が中心となって開催している委員会での協議を踏まえて、学級担任が家庭訪問を繰り返し、本人との関係を切らさないようにした。また、その際に保護者との状況共有を通して、学校の様子を伝えるとともに、家庭での生活状況も把握した。

個別支援シートを作成

個別支援シートを作成し、具体的な支援計画を校内の支援体制の中で共有した。支援シートの内容についても検討を行い、必要な内容を確認して個別支援シートを作成し、保護者とも内容を確認した。

氏名	性別	学年	担当教員
〇〇 〇〇	男	1年	〇〇 〇〇
〇〇 〇〇	女	2年	〇〇 〇〇
〇〇 〇〇	男	3年	〇〇 〇〇
〇〇 〇〇	女	4年	〇〇 〇〇
〇〇 〇〇	男	5年	〇〇 〇〇
〇〇 〇〇	女	6年	〇〇 〇〇

S S W の活用

不登校加配教員が中心となって開催している委員会での協議を踏まえて S S W と連携をし、家庭訪問を行い、当該生徒とその保護者への支援を継続した。学級担任が訪問できない時に、S S W が対応し、対象生徒との定期的な面会を保ち、関係を絶やさないようにした。

適応指導教室

当該生徒に、「学びたい」という気持ちが芽生え、教育支援センターへの登校を望むようになった。そして、教育支援センターに通うとともに、週に 2 回放課後の時間に登校することができるようになった。また、学校行事にも興味を示すようになった。

成果

現在、教育支援センターに通うことができるようになり、一部の授業にも参加することができている。さらに、学校行事に関しても、興味を示すなど登校意欲の向上が見受けられる。

課題

登校意欲の向上が確実な登校につながるようにするためには更なる働きかけが必要である。

不登校対応加配教員による不登校未然防止の取組

不登校生徒の状況

本校では、新規不登校生徒数や継続不登校生徒数の対応の改善が大きな課題の一つである。特別支援教育の取組も含めて不登校生徒の支援に限定せずに、十分な睡眠時間の確保を含めた基本的な生活習慣の確立や自己管理できる力を高めるため、全ての生徒を対象として、不登校の未然防止や魅力ある学校づくりに取り組んでいる。

具体的な取組

○別室登校「ほっとルーム」の環境整備

- ・廊下から教室が見えないように、カーテンを替え、机等の配置を工夫して学習に集中できるように教室環境を整備した。



- ・校務支援システムの掲示板機能を利用して別室登校の生徒情報を教職員に提供し、支援の充実につなげた。

○子ども睡眠健診プロジェクトへの参加

- ・東京大学大学院と連携し、十分な睡眠を含めた基本的な生活習慣を考えさせる機会を設けた。



○学校生活に関する意識調査の実施

- ・上智大学の教授と連携して意識調査を継続的に実施し、実態把握を通じて未然防止に向けた方策を考えた。

○不登校支援に関する校内研修会の企画・実施

- ・不登校生徒の情報共有だけでなく、ICTの活用やアンケート結果の分析、特別支援教育の観点からの支援の在り方など、様々な視点から不登校支援を考える年6回の校内研修会を企画し、支援体制の強化に努めた。

○不登校支援に関する教職員への啓発

- ・加配教員連絡協議会や都主催の連絡会への参加を通じて得た不登校支援に関する情報について、校内の教職員に還元した。特に教育機会確保法の観点から、登校や教室復帰を強制するのではなく、不登校生徒の自立に向けて寄り添う支援を目指すことを確認した。

成果

- ・柔軟な対応による支援に向けて、教職員が考えを深める機会をつくることができた。
- ・一人一人の生徒に寄り添う支援の在り方や、多様性を認める学校づくりに向けて教職員が考えを深めることができた。

課題

- ・登校を開始する生徒は増加傾向にあるが、30日以上欠席の生徒は増えているため、数値上の結果は改善することが難しい。

不登校生徒の登校支援に向けた組織的対応・関係機関との連携・継続的な指導の一体化について

不登校生徒の状況

当該生徒は、現在中学校 3 年生で、小学校 4 年生ごろから不登校となっている。入学後、数日は登校できたがその後、登校ができなくなった。スクールカウンセラーの面談を継続して行っており、医療にもつながっているが改善は見られなかった。

具体的な取組

1 年生から不登校対策委員会や校内特別支援委員会で毎週状況を組織的に確認している。家庭からの要望もあり、早い段階からスクールカウンセラー、心のふれあい相談員等につなげ、別室指導などを行った。教育支援センターにも申請をし、1 学期は数回通室した。

当該生徒は、登校しようという気持ちはあっても動くことができず、1 年生の 2 学期ごろからは、家から出られない状態が続いていた。担任は定期的に連絡を取り、家庭訪問を繰り返した。このような状況の中、不登校対策委員会で不登校対応加配教員の提案により 1 年生の 12 月ごろから、SSW にもかかわってもらうようにした。

2 年生 10 月頃より SSW の関わりがあり、外出をすることができた。また、教育支援センターに通うことができるようになった。12 月ごろからは学校にも登校できるようになり、不登校対応加配教員を中心として保健室や相談室への教室環境を整えた。別室登校の対応も学校生活支援員の協力を得ながら準備した。



課題

当該生徒は学習の度合いがゆっくりであるため長い時間がかけるながら支援を継続させることが必要である。また、養護教諭と別室指導の担当で信頼関係を築いているが、人とのつながりを広げていくようするため、なるべく多くの教職員が関われるような支援体制や職員の意識を高めていくことも課題である。

成果

現在、教室への復帰はまだできていないが継続的な登校が続いている。それは、不登校対応加配教員の調整により保健室や相談室へ来ることができるようになり、得意なことをやるために別室登校も継続的にできるようになったためである。学習面に関心をもち始め、進路についても意欲的に考えるようになってきた。